

## 綾瀬市立綾瀬小学校

研究テーマ：「自分ごととしてとらえ、表現できる子の育成」

～学びが実感できる振り返りに重点を置いた授業改善～

### 1 実践の目的

学習指導要領では、これまでも言われてきた「生きる力」をさらに具体化し、各教科等の目標や学習内容を3つの柱に再整理し、「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」という3つの資質・能力の育成を掲げた。そしてその3つの力を付けるために必要なこととして①主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの授業改善と②各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現という2つを充実させることが大切だとも述べられている。

綾瀬小学校の児童の実態として、話を聞く力に課題があるという意見がある。また、自分で考えて行動する力も継続して育てていきたいという教職員の思いも強い。人の話を聞くことができれば、人間関係も良くなり、人を思いやる心も育っていくのではないかと考えられる。目的を達成するためには、今後も話す、聞くといった基礎・基本の定着を図りながら「思考力・判断力・表現力」を高めていく必要がある。「思考力・判断力・表現力」を付けるためには①の主体的・対話的で深い学びを充実させることが重要となる。学習指導要領でも、「思考力・判断力・表現力等」は「深い学び」の中で身に付くものだとされている。ここでいう「深い学び」とは、各教科等で身に付けた資質・能力を「活用・発揮」することで実現できる

ものだとされている。また、そういった活動を繰り返し行い、課題を自分で解決していくことで育まれていく力だとも述べられている。つまり「深い学び」を達成させるためには学びの過程を充実させていく必要がある。そのために、総合的な学習の時間や生活科で、地域と関わりながら活動することが有効だと考えられる。

### 2 実践の内容

総合的な学習の時間や生活科を中心に、地域のひと・もの・ことと関わりながら児童が主体的に学習に取り組む単元づくりを行った。また、児童の振り返りを基に授業改善を行うことで、児童がより主体的に学習に取り組めるよう努めた。

年度初めに、各学年が総合的な学習の時間の年間計画を立てる機会を設けた。1年間の見通しをもつことや、目指す児童像を確認したことが、学習を計画的に進めることにつながった。また、単元構想表となる「学びのデザイン」を作成することで、育てたい資質・能力を意識して指導することができた。

今年度は低・中・高・特別支援のブロックが1本ずつ研究授業を行って授業改善に努めた。ブロックで1本にすることで、ブロック会議を行う時間をきちんと設け、事前授業の後にも、協議を行うことができた。また、協議では、授業の様子や児童の振り返りを鑑みながら、授業改善につながる話し合いを行うことができた。

研究授業を行わない学年は、校内研修を行った。3つ設定した仮説のうちの1つを中心に、日々の実践の紹介や授業改善の提案を行った。

本校の実態として児童の読み・書き・計算の力が低いことが挙げられる。そのため、「基礎・基本部会」で児童の力を引き上げていくために何ができるかを検討した。その結果、今年度は算数の四則計算の定着に力を入れることが決まった。各学年が授業で日常的に計算問題に取り組みせることで、少しずつ計算の力が付いてきた。

地域教材や外部講師は、次年度以降にも引き継ぐことができるように、一覧表を作成している。学校としての系統性をもつために、各学年の既習事項もまとめるようにしていく。

～授業スタイルの共通化（振り返りを通して）～

日々の授業では、学習した内容の振り返りを書かせることを意識して指導を進めた。また、児童が何を振り返りに書けばよいのかが明確になるように、めあての設定を意識するようにした。また、学習の内容をきちんと振り返れるように、授業の中で書く時間を確保するようにした。

### 3 実践の成果

年間指導計画を年度当初に各学年で検討したことで、地域と計画的に関わることができた。研究を続けていることで、地域とのつながりが広がったり深まったりしているのを感じることができた。地域コーディネーターとの連携も、回数を重ねるごとにスムーズになっているので、研究を続けることの大切さを実感した。

振り返りは、授業改善につながるものが

理想だが、今年度は、まず、児童の書く力を高めることを目標に行った。継続的に振り返りを書くことで、少しずつ書く力が付いてきたと感じる。今後は、児童の振り返りを、より授業改善に生かせるように取組を続けたい。

年2回実施の「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業に係る児童アンケート」の「授業の終わりには、学習したことを振り返り、自分の言葉で書くことができますか。」という質問では、約7割の児童が肯定的な回答をするに留まった。より定着させるために、児童がその効果を感じられるようにするとともに、授業や単元の構成を工夫していきたい。

### 4 今後の展開

次年度も研究の方向性は変えずに、児童が課題を自分ごととしてとらえ、主体的に学習に取り組むことができる授業づくりを行いたい。

来年度は、講師を呼び、児童の振り返りを効果的に授業改善に繋げる手法を全職員で探していきたい。